

2人の赤龍帝 ～真なる 赤龍の魂を持しもの～

大熊猫シャンシャン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤龍帝の弟は理不尽の果てに何を手に入れるのか…

はじめましてシヤンシヤンです。 処女作です。

ハイスクールD×Dはアニメとハーメルンの他作品の知識しかありません。

誤字、脱字等あれば報告お願いします。

タグにもあるように超不定期更新ですがよろしく願います。

非ログインユーザーの皆様からも感想を頂けるようにしました。

6 / 2 タグに イザイヤ×アシア を追加

6 / 3 ヒロインをヴァーリだけに変更しました

6 / 4 設定更新

6 / 1 3 2人の赤龍帝（仮）から、

2人の赤龍帝く真なる赤龍の魂を持しものくに変更

6 / 1 6 変態と弟を再投稿

7 / 2 3 設定の後書き部分にアンチ対象を記載

目次

始まり

設定 | 1

変態と弟（再） | 8

誠次の行く末 | 15

誠次の居場所 | 23

今代の赤龍帝は… | 29

誠次の人工神器 | 35

ドライグの 悲劇？ 喜劇？ | 39

ライザー編後 | 43

アーシアと木場（イザイヤ）編

アーシアと木場Ⅰ | 50

アーシアと木場Ⅱ | 55

アーシアと木場Ⅲ | 61

アーシアと木場Ⅳ | 66

アーシアと木場Ⅴ | 69

アーシアと木場Ⅵ | 73

アーシアと木場 E N D | 76

始まり

設定

設定

兵藤 誠次

今作の主人公

身長170 cm

一誠とは双子

一誠の髪をウルフカットにした感じ

兄とは違い変態ではなく

兄のせいで人間の友達はいない

最悪な偶然？（必然？）が重なり家を追い出され

はぐれ悪魔に殺されそうになった時

ヴァーリに助けられた

赤龍帝の籠手は何故か魂と本体に別れ

誠次が魂 一誠が本体を持って生まれた

神器

人工神器 魂の武器

魂と結合し自分に合った武器となる

←

赤龍帝の剣（ブーステッド・ソード）

龍の文様が入った赤い剣

人工神器がドライグの魂にも反応したため

倍加の力を持った神器になった

赤龍帝の籠手と同じかそれ以上の力

←
→

???

禁手化

???

???

???

通常時

boost

10秒ごとに力が2倍になる

explosion

倍加のストツプ

キャパティを超えた場合は

自動でストツプする

???

禁手時

????????????????????
時

ヴァーリ・ルシファー

今作のヒロイン

身長 165 cm 胸 B

髪色は原作のままロングヘアー

はぐれ悪魔に殺されそうになっている誠次を助けた

神器

白龍皇の光翼（デイバイン・デイバイディング）

白龍皇アルビオンが封じられている光翼

原作と同じ

禁手化

白龍皇の鎧（デイバイン・デイバイディング・スケイルメイル）

殆ど原作と同じだが、女性用になっている

覇龍

原作と同じ

通常時

Divide

10秒ごとに触れた者の力を半分にする

禁手時

Half Dimension

物体だろうと空間だろうと周囲のあらゆるものを半分にする領域を展開する

アザゼル

原作のまま

ヴァーリの尻に敷かれている

シエムハザ

苦勞人

松田 原作のまま 変態なクズ

元浜 原作のまま 変態のクズ

兵藤一誠

原作の主人公でありアンチ対象

変態のクズ

神器

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

原作のままですドライグが中にいない

禁手化

原作のまま 腕を代償にできたのは想いの力が一定以上に達し承諾機能のようなものが常にONの状態になっているから

通常時

原作のまま

禁手時

原作のまま

白龍皇の籠手は手に入れない

リアス

原作のまま

誠次のことをあまりよく思っていない

一誠の部屋と間違えて誠次の部屋に入ってしまったのは焦って転移先を間違えただけだが、その後ずっと泣いていたのは演技でちよいどいいから誠次を追い出そうとした

その後関係者から誠次の記憶を消した

能力は原作のまま

アジア・アルジェント

原作のまま

困っているところを木場に助けられた

その後原作通りに進み悪魔に転生 最初はリアス、一誠、朱乃のことは普通だったが、

弟の誠次のことを知り何も思っていないことに対して不信感を持った

ライザー編では、一誠に十字架と聖水を取られた そのことから苦手になった
神器

聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）

原作のまま

木場悠斗（イザイヤ）

原作のまま

アーシアを助けて教会まで道案内をした

そしてリアスに理不尽さに違和感を感じている

フリードはライバル的存在

神器

魔剣創造（ソード・バース

原作のまま

フリード・セルゼン

原作のまま？

木場のキーマン及びライバル的存在

変態と弟（再）

三人称 s i d e

「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア」」

「やべ バレた」

「「まてええええええええええええええええ」

覗き魔ああああああああああああああああああああ」

「うわああああああああああああああああああああ」

此処は駒王学園高等部、元女子校で今は共学である

そんな学園の昼休み女子の叫び声が響いた。

一人称 s i d e

「ただだよ」

「まただな」

「あいつの兄貴だろ」

「ホント迷惑だよな」

俺の名前は兵藤 誠次 駒王学園高等部2年だ。

そして今覗きをしているのは俺の双子の兄兵藤 一誠

コイツは、エロの化身と言われるぐらいの変態だ。

他の2人の変態と覗きをするは平気でアダルトビデオを

机の上に広げるわで嫌われていて変態3人組と呼ばれている。

それだけなら別に良いのだが、

嫌言い訳ではないのだが何故俺まで嫌われなくてはならない。

一誠のせいで友達を作ろうにも女子には冷めた目で見られ、

男子にはあいつの弟だと言うだけで嫌われる。

前に一回あいつに辞めてくれと言ったら

「うるせえ、何しようが俺の自由だろ」と言われ殴られた。

その後

「まずお前は俺の邪魔するより友達を作れ友達さえ作れば

俺たちのやっつてることが分かるようになる」

とかほざきやがって流石に俺も切れて殴った

それから殴り合いの喧嘩が始まり親に止められるまで続け

そのまま兄弟仲は悪くなり口も聞いていない。

まあ俺たちの兄弟仲が悪くなっても

長い沈黙の後いきなり叫びだした

ドタドタ バターン

「部長! どうし…ま…し」

今の状況やばいな裸のリアス先輩と抱き合う俺てか

抱きつかれてる俺だがあの変態にはどうでもいいだろ俺が裸のリアス先輩といることが重要だな。

「イツセー!」

「誠次!!! お前は何してんだ!!!」

ドゴツ

殴られた何故だ?

「部長、大丈夫ですか?!?」

「どうしたのー誠何があつたの?」

「リアスちゃんのかげび声が聞こえたからきて見たがこれはどういう状況だ?」

「どうもこうも誠次が部長をレ○プしようとしたに決まってるじゃないか!」

「ふざけんな! 俺がそんなことするわけないだろ!」

「じゃあなんでリアス先輩は裸なんだよ!」

「知るかそんなこといきなり裸で現れたんだよ!」

「いい加減にしろ！」

ドガッ

何故か俺が殴られた

「前からお前はなにかをやりそうだと思つてたが、まさかこんなことをするなんて」

「そうよ！ どうしてあんたみたいなのが息子なのよ！」

「なに…言つてる…んだ？」

「もうお前と過ごすとはできん！ 今すぐ出て行け！」

「今すぐ出で行きなさい！」

何故？ どうして？

「早く出ていけよ犯罪者！」

なんでだよ俺はなにもしてないのにリアス部長は泣いていて何もできないし

両親と一誠は俺に出で行けと言う

「何してる！ 早く出で行け！」

クソ!!!

もう知るか！

出で行けと言うなら出で行ってやるよ！

夜の公園

昼間と違って誰もおらず静かである

「ハアー　なんで俺がこんな目に合わなければ行けないんだ」

これからどうしようか行くあてもないし

そんなことを考えていると何か近づいて来る気がした

「おい坊主、こんな夜中に何してんだ？」

「家を追い出されたんだよ」

「ほう？　つまりお前は一人というわけ」

なんなんだコイツは嫌な感じがするな

「ふふふふ　あははははははははははは」

急に笑い出してどうした？

「ちようど良かった腹が減ってたんだ」

何を言ってるだ？

メキメキバキボキ

「俺はA級はぐれ悪魔バルトラちようどいい人間俺に食われる」

!? どうなってるやがるいきなり化け物に　なりやがった

A級？　はぐれ悪魔？　一体なんなんだよ

とりあえず逃げるしかない

動けない！逃げたいのに逃げれない

「どうした？怖くて声も出ないか？」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

逃げたいのに恐怖で足がすくんで逃げれない

「まあいい それじゃあいただきまーす」

食われる
!!!

h a l f d i m e n s i o n

「ぐわああああ」

「なんだ！きs」ボキヤ

なんだ？変な音が聞こえたと思ったら化け物の声が消えた？

恐る恐る目を開けると月明かりに照らされた美しい龍がいた

誠次の行く末

誠次 side

「うわああああああああああああああああああ」

バサア

「ハアハアハア」

「なんだ夢か」

そうだよなあんなの夢以外にありえるわけないよな

「あれ?…ここはどこだ?」

今気づいたがここは俺の部屋じゃない!

「(どこどこだよ!」

誘拐か? だが俺を誘拐してもなんの意味もないし

「起きたみたいだね?」

俺が考え込んでいると声が聞こえてきた声のした方を見てみると

「!」

美少女がいた

「体の方は大丈夫？」

「あの…えつと…その…大丈夫…だよ？」

「なんで疑問形？」

「ああ…大丈夫」

やべー 緊張する

「よかった」

そうだこの子にここがどこか聞けばいいんだ

「あの聞いてもいいかな？」

「なに？」

「此処はどこ？ 君の名前は？」

「まだ名乗ってなかったね私の名前はヴァーリ・ルシファー君の名前は？」

「兵藤 誠次」

「誠次くんねそれで此処はグリゴリっていう組織の本拠地だよ」

「グリゴリ？」

グリゴリなんて聞いたことないな

「グリゴリ正式名称神の子を見張るもの」

「神の子を見張るもの？ 何かの宗教団体か？」

「宗教団体かあ…まあ近いと言えば近いね」

マジで宗教団体なのか?!

「グリゴリは墮天使の組織なんだよ」

墮天使?!? 墮天使ってあの黒い羽が生えてる天使の?!? 実在してるのか?

嫌もしかししたら墮天使が好きなただの美少女かもしれない

「その様子だと信じてないね」

「まあそりゃあいきなり墮天使なんて言われて信じる方がおかしいだろ」

「まあそうだよね」

「もしかして天使や悪魔もいたりして」

「うん、いるよ」

「マジ?」

「マジ」

嫌まだ本物を見たわけではないしこの娘の妄想だということもありえるわけで

「というか昨日、悪魔に襲われてたじゃん」

昨日? もしかしてあの化け物かのことか?

「え…あれって夢じゃあ…」

「現実だよ」

「大丈夫!!!」

三人称 side

此処は誠次が眠っている病室

「その坊主の容体はどうだ？」

「さつきは混乱してたようだけど今は安定してるよ」

「そうか、だが何故混乱したんだ？」

「家に送ってあげるって言ったら嘘だ嘘だってうわごとのように

言い出したんだよ」

「そうか…これは調べる必要があるそうだな」

「私からもお願いするよアザゼル」

「ほう…お前からそんな言葉が出てくるとはな」

「なんだかほっとけなんだよね」

「そんじやあ俺はちよつと調べてくるから坊主のこと頼んだぞ」

「はい」

「さてとヴァーリにも頼まれたしな本気で調べますか」

「これは…」

アザゼルは手元にある資料を見て驚愕した

「ただの一般人なら記憶を消して終わりだがこいつはな」

何故なら誠次が

「なんでよりもよって、赤龍帝の弟なんだよ」

赤龍帝の弟だからだ

「赤龍帝と言えば最近、グリモリーの嬢ちゃんの眷属になった奴じゃねえか」

(しかもはぐれに襲われた経緯を見たら)

「グリモリーの嬢ちゃんが赤龍帝の部屋と間違えて裸で侵入、そこから赤龍帝が勘違いして殴り両親にも信じてもらえず家を追い出されたか…」

混乱したって事も納得がいくな

「こりゃあ結構な問題だな」

(赤龍帝の弟ってことは間接的に悪魔勢力に所属していることになるが、今は絶縁の様な状態だからどの勢力にも所属していない。見方によって違ってくるからな。う

ちに置いていたら三大勢力で問題になってしまう可能性もあるしな。最悪戦争に成りかねない。」

「アー！ クソ！ シェムハザー!! 助けてくれー!」

「どうしたんですかアザゼル!? 今度は一体何をやらかしたんですか!?」

「実はな………てな事があつてな 今どうしたものと悩んでるところなんだ 助けてくれ」

「はあー また面倒ごとを持ち込んで」

「な!? 今回は俺じゃなくてヴァーリが悪いだろ!」

「いいえ! 貴方は一応ヴァーリの保護者でしょ! 監督不行届ですよ」

「そんなあ」

「とりあえず誠次くんはうちで預かりましょう」

「大丈夫なのか?」

「居るのがバレたとしても絶縁状態なら大丈夫ですよ それに誠次くんにはなんの力もないのでしよう?」

「ああ 神器の反応は無かった」

「悪魔たちが何の力もない人間を保護すると思えますか?」

そう悪魔は欲望に忠実、つまり使えない人間を保護するはずがない

「確かにそうだな よし！ うちで預かろう」

「それでは受け入れの準備をしておきますね」

「おう頼んだぞ」

誠次の居場所

一人称 side

「ウウ……ン……ここは」

俺は気がついたらベットのの上にいた

「起きたみたいだね 急に倒れてびっくりしたよ」

「倒れた?……」

(倒れたって……ああそうか思い出した)

「やっぱり夢じゃなかったんだな」

(クソ夢だと思いたい出来事ばかりだ)

「大丈夫?」

「大丈夫だ 心配かけたようでごめんな」

「気にしなくていいよ」

そう言つてヴァーリちゃんはニコツと笑つた

(! かawaii……すぎ……る)

「どうしたの? 顔が赤いよ?」

「嫌！ 何でもないよ！」

「そう？ それなら良いんだけど」

ガチャ

「おーい ヴァーリ！ 坊主は起きたか？」

「あ！アザゼル！ 誠次なら今起きたよ」

急に扉が開いてアザゼルと呼ばれるちよいワルオヤジ風の人が入って来た

「おお！ 起きたかちようどよかった」

「あの…貴方は？」

「お？ そうだな先ずは自己紹介しなくちやな

俺は神の子を見張る者の総督アザゼルだ」

ドヤ顔で自己紹介して来た

（総督!? つまり…なんだ?）

「あの一」

「ん?なんだ?」

「総督って…なんですか?」

「な!?」

アザゼルさんは驚いて声を上げ

「まあそうなるよね」

ヴァーリちゃんは呆れていた

「総督って言うのはね簡単に言うとは一番偉い人のことだよ」

「なるほど一番偉い人か…一番偉い人!?」

（やばい！ そんな偉い人だったなんて）

「あの…その…えつと先程は…」

「あはは そんなに畏まらなくて良いよ 総督って言っても肩書みたいな者だもん」

「な!? 何言ってるんだヴァーリ！」

「だって本当のことじゃん ほとんどの仕事シエムハザさんに丸投げして自分は研究ばかりじゃん」

「嫌…それは…その…」

「なんだか親子みたいだね」

（娘の尻に敷かれる父親みたいだな）

「まあ、あながち間違っちゃいない 一樣コイツの保護者だしな」

（じゃあ本当に尻に敷かれてるんだ）

「さあこの話はここまでにしておこう」

本題に入るぞ 坊主お前これからどうする?」

アザゼルさんはおちゃらけた雰囲気から真面目な雰囲気に変わった

「どうするって?」

「簡単に言うとお前に行く場所はあるのか?」

「それは…」

（家にはもう帰れないし友達もない俺には行く場所が無い…今気づいたけど俺めちゃくちやばい状況じゃないか!）

「まあお前の考えていることは大体分かっている行く場所がないんだろ」

「なんで分かったんですか!?!」

「そりゃあお前について色々調べたからな」

「そうですか…」

「そこでお前に提案がある」

「提案?」

「お前うちに来ないか?」

「え?」

「だからうちに来いって言ってるだよ 勿論きちんと仕事をしてもらうがな 安心しろ 働いた分の給料は出してやる」

「え? 良いんですか?」

「別に良いぞうちはお前のような奴を保護したりもしてる それにうちに来ればいつでもヴァーリに会えるぞドゴオ」「何言ってるの!」

ヴァーリちゃんが怒ってアザゼルさんを殴った

(怒ったヴァーリちゃんも可愛いな)

「いつてえな! 何しやがる!」

「アザゼルがいきなり変なこと言うからでしょ!」

「クソオ イツテエ で? 坊主どうするんだ?」

(ここから出ても行く場所は無いし…それにここにいれば仕事もあし何よりヴァーリ…いかんいかん何を考えているんだ)

「…決めました これからお世話になります」

「そうか 改めて挨拶しよう俺は墮天使組織グリゴリの総督アザゼルだ 普通にアザゼルと呼んで来れて構わない よろしくな」

「じゃあ私も 私は墮天使組織グリゴリ所属のヴァーリ・ルシファアだよ 呼び方はヴァーリでいいよ

これからよろしくね」

「じゃあ俺も 俺は兵藤誠次 まあ親にも捨てられたし誠次でいいか 呼び方は普通に誠次で頼む」

これからよろしくお願いします」

今代の赤龍帝は…

一人称 side

「よしとなれば早速行くぞ」

そう言いながらアザゼルは立ち上がった

「どこに行くんですか？」

「とりあえずついて来い　そういえば体調の方は大丈夫か？」

「はい　大丈夫です」

「なら行くぞ　俺は寄るところがあるから…ヴァーリ闘技場まで案内頼めるか？」

「うんいいよ」

「という訳でヴァーリに案内してもらってくれ

詳しい事は向こうで話す」

そう言つてアザゼルは部屋を出て行つた

「それじゃあ付いてきて」

闘技場に付いたがまんまコロシムだった

「アザゼル遅いね」

「そ…そうだな」

（ヤバー2人つきりつて緊張する）

「どうしたの？」

そう言つてヴァーリが首を傾げた

（ぐふあ 可愛すぎる…前もこんな事あった気がする）

「おーい すまん待たせて 探し物が中々見つからなくてな」

そう言い訳しながらアザゼルが現れた

「もう遅いよ！ だからいつもきちんと整理整頓してつて言ってるでしょ」

そしてヴァーリに怒られた

「それは… ゴホン とりあえず誠次これからお前は此処に済む訳だがお前に渡さなければいけないものがある」

ヴァーリに怒られたことを誤魔化して丸い手のひらサイズの球を取り出した

「なんですか？ それ？」

「これは人工神器だ」

「人工神器?」

「まずこれの前に神器について説明しなくちゃな」

「神器って言うのは特定の人間に宿る、規格外の能力のことだ。聖書の神が人間に与えたもので歴史上の偉大な人物の多くが所有者とされている

神器は人間か人間の血を引く混血に先天的に宿るもんだ。ただし所有者から奪って後天的に手に入れることも可能だ。人間じゃなくなっても無くなることはないがな

「ここまでは良いか?」

「まあ、いくつか気になる言葉があったけど」

「なんだ? 言ってみろ」

「人間の血を引く混血とか人間じゃ無くなるとか」

「ああ…まあその辺はまた後日教えるってことで神器については理解したか?」

「そっちはなんとなく理解した」

「よし、じゃあ続けるぞ。殆どは人間社会でのみ機能するものだが、中には神をも脅かす能力のものも存在し、それらは神滅具（ロンギヌス）と呼ばれている。他にも同じ神器でも形状や能力に多少の違いがあるものもある。それは亜種と呼ばれるもの。神滅具には入っていないが神滅具級のものもある

此処からは神滅具の説明だが、神滅具は

黄昏の聖槍 トウルー・ロンギヌス

幽世の聖杯 セフィロト・グラール

赤龍帝の籠手 ブーステッド・ギア

白龍皇の光翼 デイバイン・デイバイディング

獅子王の戦斧 レグルス・ネメア

蒼き革新の箱庭 イノベート・クリア

永遠の氷姫 アブソリユート・デイマイズ

絶霧 デイメンション・ロスト

紫炎祭主の磔台 インシネレート・アンセム

煌天雷獄 ゼニス・テンペスト

魔獣創造 アナイアレイション・メーカー

黒刃の狗神 ケイニス・リユカオン

究極の羯磨 テロス・カルマ

と言う13種の神器のことだ」

「理解出来てるか？」

「大丈夫」

「よし、そして神滅具の一つ白龍皇の光翼をヴァーリが持っている」

「もしかして俺を助けてくれた時の鎧？」

「うーん 間違つてはいないんだけど」

「見せた方が早いね」

Divide!

「グハア」

アザゼルに触れた瞬間、音声と共にヴァーリの背中に翼が生えた

(綺麗だな 隣でアザゼルが悶えているけど、どうでも良いと思えるほど綺麗だ)

「つて! アザゼルどうしたんだ!?!? 大丈夫か!?!?」

「なんとか無事だ:いきなり何しやがるヴァーリ!」

「だって実際に見せた方が説明しやすいじゃん」

「それはそうだがやる前に一言ぐらいかけてくれても」

「そんなことより早く説明しないと時間なくなっちゃうよ」

「クソオ 覚えてろよヴァーリ 今俺が苦しんでたのは力を半分にされたからだ」

「半分？」

「そうだ 白龍皇の光翼の力は10秒ごとにDivideの音声とともに触れた者の力を半分にして吸収することが出来るんだ そしてこの神器にはアルビオン・グウィバー
と言う龍の魂が入っている」

『貴様が今代の赤いのの宿主の弟か』

ヴァーリの背中から声が聞こえてきた正確には翼だが

「うわぁ びっくりした 誰の声？ てか今代の赤いのって何？」

「この声は神器に宿っているアルビオンのものだ 今代の赤いのっていうのはだな…」

アザゼルがなんだかとても言いにくそうに話し始めた

「実はお前の兄なんだが神滅具の一つ赤龍帝の籠手の所有者なんだ」

「!?？ 嘘だろあんな奴に神をも殺せる力が宿っているのか？」

誠次の人工神器

一人称 side

「なんで…あいつばかり…」

(なんであんな変態が恵まれるんだ!?!? 俺はあいつのせいで全て失ったのにあいつはきつと今も犯罪じみたこと、いや、犯罪を犯しているんだろうな)

なんでなんだ 俺のなにが行けないんだ!)

「大丈夫? 顔色悪いよ 少し休んだ方が良いよ」

「大丈夫だ 心配かけてごめんな」

「気にしなくて良いよ」

そう言つてヴァーリはニコツと笑つた

(ちくしょう可愛すぎる…)

「落ち着いたか?」

「ああ大丈夫だ…てかなんでアザゼルはアイツがその赤龍帝つてこと知つてんだ? 俺の時みたい調べたのか」

「いや、お前の兄貴は悪魔勢力に入ってるんだ」

だから何もしなくても勝手に情報が入ってくるだ」

「悪魔勢力？」

「そのまんま悪魔の勢力のことだ　おまえの兄貴は一度殺されたんだそして悪魔に転生した」

「ふ〜ん」

（殺された？　なんか話がややこしくなってくるな）

「はあ　分かってないようだからこれも後日な

　だいぶ話がそれちまったがこれからは大本命

　この球についてだ」

　そう言つてアザゼルは最初に見せてくれた球を取り出した

「この球は人工神器つて言つて俺が作ったんだ」

「人工神器？」

「簡単に説明すると、これもまんまだが人工的に作った神器だ　本物には無い能力や強力な能力の劣化版つて認識でいい」

「へエ〜　これが…」

「これはお前にやる」

　そう言つて球を差し出した

「え？　なんで？」

「三大勢力って言うのがあってな墮天使、悪魔

そして天使この三組織の事を指すんだが…俺たちは仲が悪い　昔戦争をしたほどに
な　今は休戦状態なんだが水面下では今も争ってないつ攻め込まれてもおかしくな
い状況なんだ

だからせめて自分の身ぐらい守れるようになってもらわないと困る」

「なるほど」

「この球は　魂の武器　って言うんだ」

「魂の…武器？」

「こいつは所有者の魂と結合して自分に一番あつた武器になるんだ特殊能力は無いんだ
がな

下手に強い力を与えてもお前にあつて無かったり制御出来なかつたら意味が無いか
らな」

「そういうものなのか」

受け取ってみるがどこからどう見ても普通の球だ

「とりあえず胸の前らへんに持つて行つてこの球に意識を集中しろ後は自動的にやつて
くれる」

「わかった」

胸の前に球を持って行って集中してみると：

ピカアー

球から強烈な光が放たれた

「うわあ！」

そしてその光が収まると手には龍の紋様が入った赤い剣があった

「これが…」

Boost!

急に剣から音声が流れた

「な!!?」

「嘘!!?」

『何故だ!』

「え!!? え!!? どういう状況!!?」

ドライグの 悲劇? 喜劇?

一人称 side

『どうなった?』

剣から声が聞こえてきた

『何故貴様が?!?』

『うるさいぞ白いの』

『なんだと! 赤いの貴様は昔から変わらん!』

『?!? 白いの! 俺の声が聞こえるのか!』

『当たり前だ 貴様の憎たらしい声を聞き間違えるわけないだろ』

『おお! やつとだ:やつと届いた』

剣から聞こえてくる声が涙ぐんだものに変わった

「ねえ アザゼル これどうなってるの?」

「俺にも分かんらん」

「あれって人工神器だよね?」

「ああ 人工神器だ 誠次の中に神器は無かった」

「じゃあなんで？」

「本人に聞くのが一番早いだろ」

そう話しながらアザゼルが近づいてきた

「取り込み中悪いが少し良いか？」

『なんだ？』

いざ落ち着いた様子で答えた

「お前は赤龍帝なのか？」

『ああ 俺は赤龍帝ア・ドライグ・ゴツホだ』

「え!?? 赤龍帝ってアイツじゃないのか？」

「赤龍帝って言うのは神器に封印されているこいつのことだ だが今代の赤龍帝はお前の兄のはずだこの情報に間違いは絶対ない どう言うことなんだ？」

そうドライグさんに話しかけた

『話せば長くなるが…俺は相棒と相棒の兄が生まれた時に何故か別れたんだ』

「別れた…だと？」

『そうだ 原因は分かんが俺は本体つまり神器と魂に別れた そして、本体は相棒の兄に魂は相棒に行ったんだ』

「!?? そんなことがありえるのか!??」

『現に今ここに俺がいる』

「まあ確かにそうだな」

『俺は封印が解かれたわけじゃないからずっと相棒の魂の近くに居たんだ』

「!?? そうか! だから魂の武器がお前さんの魂に反応したのか!」

『多分そうだろう』

「あの一 ドライグさん少し良いですか?」

『ドライグで良い で、なんだ?』

「あの難しいことはよく分からないんですが…」

「ごめんなさい」

『? 何故相棒が謝るんだ?』

「それは、俺がいたせいでドライグs…ドライグに悲しい思いをさせなしまったから」

「悲しい思いだと?」

ドライグは何を言ってるんだと言うふう聞いてきた

「だってさっきの涙ぐんだ声を聞いたらわかるよ」

ドライグはずっと僕の中に1人で居て寂しかったんでしょ? 間違ってたらごめん

そして気づけなくてごめん」

『ククク アハハハ やはり相棒は優しいな 確かに寂しく無かったと言ったら嘘にな

る　だがそのことで相棒を恨んだことはない　気づけなくて当たり前だしな』

そうドライグは笑いながら言った

『それにな俺は嬉しいんだぞ』

「嬉しい?」

『ああ　俺はずっと相棒の兄を見てきたがあんな奴が相棒になっていたらと思うとゾツとするよ』

だからこれからよろしく頼めるか?　相棒、いや、誠次』

「こちらこそよろしくドライグ」

ライザー編後

誠次 side

アザゼルに人工神器を貰ってから二週間が過ぎた

(この二週間色々な事があったな：シエムハザさんには各勢力のことを教えて貰ったり、アザゼルには神器について色々教えて貰ったり、ヴァーリと戦ったり…)

「なあ…ドライブグ」

『なんだ？相棒』

「本当に禁手化なんてできるのか？」

『分からね アザゼルが言うには、至るかどうかは今のところわからないらしい やるしかない』

俺は今、禁手化できるよう絶賛修行中である

「そうだよな！このままじゃヴァーリには勝てないし、絶対になって見せるぜ！」

『その意気だ相棒！ 神器は想いの強さに反応する人工神器も一緒だとアザゼルが言っていた』

「ドライブグ、さっきから答えが曖昧な気がするんだけど…」

『し：仕方ないだろ！ 人工神器なんて俺にもよく分からないのだから』

「おーい 誠次ー！」

ドライグとそんなやりとりをして居ると俺を呼ぶ声が聞こえてきた

「どうしたんだヴァーリ？」

（今日も可愛いな）

「アザゼルが会議室に来てさ」

「何かあったのか？」

「分からない 来たら話すって言ってたから」

「そうか：：とりあえず行くか」

『おい待て相棒』

「なんだよドライグ？」

『流石にその格好はまずいだろ』

「確かに」

俺の今の格好は汗だくのジャージ姿だ

「ヴァーリ アザゼルにシャワー浴びて着替えたらすぐ行くって伝えといてくれ」

「わかった 伝えとくね」

ガチャ

「すまん待たせたな」

俺が部屋に入ると全員の視線が向けられた

「遅かったな まあ良い 早く座れ」

そうコカビエルが言ってきた

「分かった」

今部屋にいるのはアザゼル コカビエル 俺 ヴァリー シヤムハザだ 他の幹部

たちは任務で不在である

「それでどうしたんだアザゼル？ 急に呼び出して」

「お前たちフェニックスとグレモリーの婚約の話は知っているだろ？」

「ああ 知っている」

「俺も知っている」

「私も」

「実はなその婚約が破棄された」

「で？ それがどうした？ 悪魔にとっては一大事かもしれんが俺たちには関係のない

「ことだろ?」

「それがな婚約が破棄になった理由が誠次の元兄がフェニックスを倒したからなんだ」

「なんだと!?」

「コカビエルは驚きの声をあげた

「どういうこと?」

俺には意味がわからなかった

「フェニックスと言えば72柱の悪魔だ そいつが形だけとは言え赤龍帝の元一般人に負けたんだ ドライグのサポートがあればいけるかもしれないが…」

「コカビエルが教えてくれた

「どうなんだ? ドライグ?」

『確かに俺が居ればいける可能性はある しかし俺は居ないどうやって勝ったんだ?』

「そこんところはシエムハザが調べてくれた」

「はい この馬鹿に変わり忙しいのに調べてきました」

(うわあ シエムハザさん怒ってる)

「倒した方法ですが調べた結果、左腕を代償にして10秒間だけ強制的に禁手化できるようにしたようです」

『なんだと!?』

急にドライグが大声をあげた

「どうしたんだよ ドライグ」

『ああ…すまん 取り乱した 本来俺が認めて代償と見合った力を差し出すのだが…一体どうやったのか疑問に思っ…ま…まさか!?? 嫌、そんなことが…』

「なんだ? 何か分かったのか?」

『まだ可能性の話だが、恐らく俺の代わりに認めたのは歴代の赤龍帝達だろう』

「歴代の赤龍帝って確か赤龍帝の籠手の中にいる残留思念のことだよな?」

『ああ 例外2人を除き全員意識はない 多分 想いの強さが一定以上に至ると自動で代償と引き換えに力を手に入れるようになってるのだろう』

例外2人も多分出てこないだろうしな』

「そういうことか だが、それだけで倒せるものなのか?」

アザゼルが納得したが新たに疑問ができたようでドライグに聞いてきた

『恐らく無理だろう 元々のスペックがあれではな』

恐らく他にも手があったのだろう』

「ドライグの言う通りです あと一步というところでタイムリミットが来てしまったみたいで強制解除された模様です」

「それじゃあどうやって?」

「資料によりますと十字架と聖水を使ったようですね」

「聖水と十字架だと？ 触れただけでもやばいだろ」

「はい 本来なら悪魔にとつてはとても危険なものです しかし彼の左手は龍の腕ですからからでしょう」

「龍の腕なら聖なる力も意味をなさないか？だが悪魔がどうやって手に入れたんだ？」

「リアス・グレモリーに新しい眷属ができたのはご存知と思います」

「ああ 元聖女のことだろ？」

「そうです その彼女から”奪い取った”ようです」

「奪い取っただと？」

「はい彼女は元を辿れば死んでいるところを悪魔に無理矢理転生させられたような者 彼女は悪魔も治すくらい優しいようなので受け入れたようですが信仰が捨てられず、しまっていたようです そして彼女は兵藤一誠、リアス・グレモリー、姫島朱乃のことは苦手だった模様で隠して居たようですが、兵藤一誠のアツチ系の物が置いてある近くだったようですぐにバレてしまっていたようです」

「あれ？ じゃあなんで聖水なんかがあるんだ？」

「どういふことだ？ 誠次？」

「いや、だって自分が住んでいる所にそんな危険なものがあるなんて知ったら普通処分

するだろ」

「確かに そこんところはどうかなんだ？」

「これは推測ですが、黙っていたのでしよう もし置いてあれば脅しに使えるとか考えていたのでしょうか 少し調べただけで悪知恵が働くことはわかりましたし」

「なるほどな」

アーシアと木場（イザイヤ）編
アーシアと木場Ⅰ

「ハアア」

僕は深い溜息を吐いた

「どうしてこうなったんだ」

思い出すのは3日前……

僕は住宅街を歩いていた。

すると曲がり角から誰かが曲がって来てぶつかってしまった

ドカ！

「キャー！」

「すいません 大丈夫……ぶ……です……か」

そこに居たのは美しいシスターだった

「こちらこそすいません……あ！もしかして言葉がわかるんですか？」

「ええ分かりますよ」

「良かった……あの……」

「なんですか？」

「道に…道に迷って困ってるんです 助けてくれませんか？」

「それぐらいなら別に良いですよ」

「ありがとうございます」

「それでどこに行きたいんですか？」

「この街にある教会に行きたいんです」

「きよ…教会ですか？」

「ええ…そうですが？」

（まずい、出会った時に気付くべきだったシスター…教会じゃないか…迂闊だった だが案内すると言った以上は仕方がないか…）

「わかりました 案内しますので付いてきてください」

案内することになってしまった

・
・
・

「あそこに見えるのが教会です この道を真っ直ぐに進んで行くと行けますよ」

「あの…ぜひお礼をしたいので、ご一緒に来ていただけませんか？」

「すいません これから用事があつて」

(やばいこの距離でも手が震えてしまう 早く離れないと)

「そうですか…私はアーシア・アルジェントと申します アーシアと呼んでください」

「僕の名前は木場 祐…いや、イザイヤだ 普通にイザイヤと呼んでくれれば良いよ」

「よろしくお願いします イザイヤさん」

「普通に呼び捨てで、イザイヤでいんだけどな…」

「すみません 呼び捨てで人の名前を呼んだことないので、頑張りつつ呼んで見ます」

「いや、無理しなくて大丈夫だよ」

「イザイヤさん…私、日本に来てイザイヤさんみたいな、親切で優しい方と出会えて、私

は幸せです」微笑みながら言ってきた

「え、いや…その…どういたしました」

「ぜひとも、お時間がある時に、教会までお越しください」

……これが彼女との出会いだったな

だけどここの後……

アーシアを教会まで案内した次の日、僕は部長に呼ばれた

ガラ

「失礼します 部長なんの御用でしよか？」

部屋には、みんな居て

リアス

朱乃

一誠

子猫

のように座っていた

「あなた昨日、シスターと会って教会まで送ったらしいわね
(やっぱりこの件か)」

「はい、確かにシスターと会って教会まで案内しました」

パチン！

「あなた！自分が何をしたか分かってるの!?!？」

顔を真っ赤にして頬を打たれた

「はい……」

「あのー部長」

「何？ イッセー」

一誠が話しかけると普段の調子に一瞬で戻った

「何故、そんなに怒っているんですか？ ただ案内しただけなら……」

「甘いわよ イッセー 教会は私たち悪魔にとつての敵地よ 踏み込んだだけで神側と

悪魔側で問題になるのよ」

「そんなやばいんですか！

おい！ 木場何やってんだよ」

急に怒り出した

「落ち着きなさいイツセー

今回は注意だけにするけど、今後このようなことが無い

ように！」

……って怒られた

アーシアと木場Ⅱ

そして僕は今……小猫ちゃんと兵藤くんとともに教会の目の前にいる

何故僕たちがここにいるのか、それは昨日の夜……

兵藤くんが契約を結びに行ったところになちようど悪魔祓いが居て、殺されそうになつたところに仲間と思しきシスターが割つて入つて助けてくれたそうだし、その後、僕たちが現場に着き悪魔祓いは逃げて行つた

まあこれくらいなら問題（ないわけではないが）ないのだが、兵藤くんがいきなり「俺はあの娘をハーレムに加える！」と言ひ出した

普通ならダメだが、部長が「そうね……私の管轄する土地で好き勝手やられるのも困るし、ついでにその娘も手に入れましょう」と言ひ出した

……ということがあり今、教会に来ている

「とりあえず俺がシスターを助ける！ それ以外の奴らは木場に任せただぞ 小猫ちゃん はゆつくりしてていいぞ」

「いえ……流石にそれは」

「大丈夫だつて！ なあ！ 木場！！？」

「流石に2人では無理があるような」

「大丈夫！ 行くぞ！」

ガチャ ギイイ

「やあやあやあやあ 待っておりましたよ クソ悪魔の皆様がた」

扉を開けた先には、悪魔祓いのフリードが待ち構えていた

「フリード！ アーシアはどこだ！」

「あゝあ 悪魔に魅入られたクソシスターならこの祭壇から続く地下の際議場におられますです」

「よし！ 木場ここはお前に任せた！ 俺はアーシアを助けに行く！」

「ちよ！ 勝手な行動は……」

「行くぜ！」 boost

「ハア！」

そのまま兵藤くんは祭壇を、壊して地下に行った

「どこまで勝手なんだ！ 小猫ちゃん！ 兵藤について行ってくれ！」

「しかしそれでは、先輩が……」

「僕は大丈夫！」

「……わかりました」

「話は終わったかい？ クソ悪魔」

フリードは左手に銃 右手に光剣を構えている

「ああ でも良かったのかい？ 追わなくて？」

僕も腰の剣を抜いて構える

「べつについで俺は下のやつらがどうなろうと、興味ないからな！」

喋りながら切りかかって来た

ひゅん！ キン！

「そうかい！」

負けずに僕も受け止め押し返す

バン！ バン！バン！

キン！キン！キン！

僕が押し返した瞬間左手の銃で撃って来たが全て切った

「やるね」

「あんたも最高、本気でぶつ殺したくなりますなあ」

「ハア！」

キン！ キン！

バン！

シュン！

「グハア！」

不意打ちの銃弾が僕の左肩を貫通して行く

銃弾が貫通したおかげで弱点である光の力はそれほどダメージにならなかったが左手が使えなくなった

「おら！おら！おら！」

キン！キン！キン！

「クツ！ ハア！」

キーン！ ヒュン！

「あつぶねえ〜」

一進一退の攻防が続く

「はあ…はあ…」

「はあ…はあ… なかなか…やりますな〜」

「君の方こそ こんなに楽しいのは久しぶりだよ」

「あハア 俺たちもこんな心踊る戦いは久しぶりだぜ〜」

「だけど、そろそろ時間がやばいから少しだけ本気で行くよ！」僕の剣が黒く染まる

「オラア かかってこいや！」

キーン！

僕の剣の黒が色がフリードの光剣の光が消えて行く

「なんだよ！ こりゃあ！」

「光喰剣（ホーリー・イレイザー） 光を喰らう闇の剣さ」

「お前 神器持ちか！」

ピピ

「……あん？ 仕事は終わり？ 今いいところなんだよ！

……ああ！もう！わかったよ！」

フリードが急に独り言を言い出した

「すまねえな俺の本当の上司が帰ってこいっていうから帰らせてもらおう」

どうやら先ほどの音はその本当の上司から連絡が来た音のようだ

「僕が見逃すとしても？」

「お前は見逃すさ なんせ愛しの聖女さまが地下にいるんだからなく」

「……」

「お、おい そこで黙るなよ！」

「ふうー 仕方ない今回だけは見逃してやる」

「へへへ そうかい」

「さっさと行け」

「へいへい：：：そういえばお前には伝えとくけどよ：：：お前、仲間には気をつけろよ 特
リアス・グレモリーと兵藤一誠、そして“サーゼクス・ルシファー”にはな」

「なぜ？」

「いづれわかる」

それだけ言い残しフリードは消えて行つた

アーシアと木場Ⅲ

フリードとの戦いが終わり僕は地下への階段を下つていた

「左腕は使えないか…」

左腕はフリードの拳銃で撃ち抜かれていて使えない

「まあ、フリードぐらいの強さでない限り大丈夫だろうけど」

そうこうしているうちに着いたようだ

「兵藤くん！小猫ちゃん！遅くなつてすま…な…?!?」

そこで僕が見た光景は…

「はじめ——て墮——使レイナーレ 私はり——グレモリー グレモリー家の——主

よ

「——モリー——娘か」

「ど——お見——置——を、短——で——け」

「ア…ア…ア…シ…ア…ア…アーシア！」

地面に倒れているアーシアだった

僕は急いでアーシアの所まで駆けて行く

「アーシア！ どうしたんだ！ 何か言ってくれ！」

揺すつても何も反応がない

「なんで…なんでなんだ…」

「おい！ 邪魔だ！」 ドカア！

僕がアーシアを抱きしめて泣いているといきなり殴り飛ばされた

「な…なにを」

「うるさい！ お前がさっさとフリードを倒してこっちに来ていればこんなことには、ならないんだよ！」

僕を殴り飛ばしたのは兵藤くんだった

「そうよ あなたが弱いせいでこんなことになったのよ」

部長が追い打ちをかけてくる

「クッ！」

殆ど真実なのでなにも言い返せなかった

「大丈夫ですか？ 先輩」

「……」

小猫ちゃんが心配して駆け寄って来てくれたが、答える気力がなかった

どうしてこんなことになってしまったんだ どうして どうして

「どうして どうして どうして どうして！」

「先輩！ しっかりして下さい！」

そして目の前がだんだんと暗くなり最後に見えたのは、赤い光に包まれるアーシアだった

「ん……ん……は？」

気がついたら部屋のソファアーの上にいる

「あー！ 目が覚められたんですね！」

「！！？」

「この声は！！？ 間違いない！」

「アー……シ……ア……なの……か……」

「はい！」

「生きていたんだな……良かった……本当に良かった……でもなぜ？ 確かに君の心臓は止

まっていた」

「はい……その……実は……私悪魔に転生したんです」

「転生したって!?? アーシアはシスターだろ!??」

シスターを転生させるなんて前代未聞だぞ!

「体に何か異常とかはないのか!??」

「はい 大丈夫です!」

「そうか…」

ガチャ

「起きたようね」

アーシアと話していると扉が開き部長と兵藤くん、姫島さん、小猫ちゃんが入ってきた

「はい すみません心配をお掛けして」

「まったくよ どれだけ心配したことか」

「…」

「とりあえず、これからのアーシアのことだけど」

「アーシアのことですか?」

「そうよイツセー とりあえずアーシアにはこの駒王学園に通ってもらおうわ 1人だけ仲間はずれば可哀想でしょ?」

「確かに…」

「そしてもう一つは、住む場所よ　とりあえず住む場所は…」

アーシアと木場Ⅳ

「当面は祐斗の家に住んでもらうことになったわ」

「何故！」

部長の言葉に僕と兵藤くんは同時に声を上げた

「どういうことですか部長！ 何故こんな奴の家にアーシアを住ませるんですか！ それなら俺の家でいいじゃないですか！」

こんな奴とは随分な言われようだ

「落ち着きなさいイツセー ちゃんと理由はあるわ」

「私も最初アーシアにはイツセーの家にホームステイとして住んでもらおうと思つていたのだけれど 部屋がないじゃない」

「確かに空いている部屋はありません！ だけど何故わざわざこいつの家なんですか！」

「確かに僕もそう思います 何故女性である小猫ちゃんや朱乃さんではなく、男性である僕の家なんですか？」

正直言つてアーシアが住んでくれるのは嬉しい 嬉しいけども、落ち着かない 唯一心を休めれる家が無くなるというのは結構厳しいものである

「それは、アーシアが祐斗の家が良いと言ったからよ」

「祐斗さんの家だと安心ですのぞ」

ちなみにアーシアには僕のこと祐斗と呼ぶように言っておいた

「まあ、アーシア自身がそう言っただんならしようがないか おい木場！ アーシアに変な事すんなよ！ 半径50メートル以内に近づくなよ！おい！聞いてるのか！」

兵藤くんが何か言っているが無視して大丈夫だろ

そして僕とアーシアの同棲が始まった

そして三日目にして終わった

兵藤くんの弟誠次くんが、部長を襲ったとして家を追い出され、部屋が空いたのでアーシアを住まわせるそうだ

正直言つて誠次くんが部長を襲ったなんて信じられない

僕は追い出された日に少し話したけれど、噂に聞いたような人物ではなくとも気が合いそうだった

部長は一般人と兵藤くんの両親から誠次くんの記憶を無くした

僕の中では最近部長たちへの不信感が高まって来ている

〜10日後〜

僕たちはこの10日間、部長の婚約を破棄するレイティングゲームのため特訓をして

いた だが結果は負けてしまった

婚約パーティーがあるから来いと言われたが体調が悪いと言いつ断った
家で疲れを癒していると誰かが訪ねて来た

「はい 誰ですか？」

「イザイヤさん」

弱々しい声アーシアの声が聞こえ急いで外に出てみるとそこには、

「どうしたんだアーシア！ 何があつたんだ！」

目を腫らし頬が赤くなっているアーシアがいた

「私…私…もう嫌です もうあの家には居たくありません」

「落ち着いて 大丈夫だから」

そう言いながらアーシアを抱きしめた

落ち着いたアーシアから話を聞くと

隠し持っていた十字架と聖水を持っていかれそうになり止めると殴られ奪い取られ
たそうだ

それ以外にも様々な犯罪紛いの行為をされて精神的にもかなり来ていたらしく喋り
終わるとまた泣き出し、泣き終わると寝てしまった

アーシアと木場V

アーシアが僕の家に来た日から5日が経った

あの後、部長が来て兵藤くんのおかげで婚約が破棄になったこと、僕がアーシアを勝手に家に連れて帰ったことに対しての処罰を言いに来たと言った

ふざけるなど言いたかったが、今何を言っても無意味であることは明白だったのでとなしく指示に従い 10日間旧校舎の空き部屋に謹慎処分ということになり部屋の周りには結界が貼ってある

ちなみに、アーシアは小猫ちゃんの家に行った

そして今僕の目の前には、

「こんにちは お久しぶりでござんすね 騎士様」

「なんで君がここにいます フリード」

「エクスカリバー」を持ったフリードが居た

そう、エクスカリバー」を持っているのだ

「そりゃあお前さんにお話があるからに決まってるだろ それに、こんな結界最強の俺様にとっては破るのなんて楽勝よ」

「話？ 剣で？」

「残念く今日戦う気はナツシング 君がエクスカリバーを憎んでるのは知ってるけどもそれも含めての話」

「そうか とりあえず聞くよ」

「話が早くて助かるよく そんなでなまず…」

く二日後く

ここは旧校舎の前

ここでは今、僕を除いたりアス眷属と地獄の番犬ケルベロス3匹が戦っている

「キヤア」

ケルベロスからの攻撃を間一髪のところまで避けるアーシア

非戦闘員であるアーシアを早く助けたいが結果がなかなか破壊できない

「クソ 早く壊れろ」

パリン

何十回目かの攻撃でやっつと壊れた

その間にゼノヴィアが加勢しケルベロスを一団、兵藤くんが部長と朱乃さんに力を譲渡して小猫ちゃんと協力して一団倒していた

そして残りの一体が少し離れた所に避難していたアーシアに向かって行ったが間一髪のところまでケルベロスを串刺しにして、助けることができた

「イザイヤさん！」

「もう大丈夫だよ アーシア」

「祐斗！あなた何してるの！」

「なかなか良い見世物だったぞ」

上から声が聞こえそちらを見ると、そこには玉座？のようなものに座った墮天使が居た おそらく彼がコカビエルだろう

部長が特大級の攻撃をするが跳ね除けられてしまう

「赤龍帝の力があればここまで力が引き上がるか…面白い…これは、ひどく面白いぞ！」
「完成だ！」

後ろから声が聞こえたと同時に激しい光の柱が出来ていて、その中心には一本の剣があった

「剣が統合される時に生じる膨大な力 俺が頂く そういう取引で」

「その力を利用して大地崩壊の術をかけたの!?!」

「ふ…」

コカビエルは一瞬僕の方を向き僕以外分らないように笑った

「防ぎたかつたら俺を倒すしか無いぞ どうする？リアス・グレモリー！」
「ここからが本番だ！」

アーシアと木場VI

「ハアア！」

「オリヤア！」

僕の剣とエクスカリバーがぶつかり合う

お互い一旦距離を取りまたぶつかり合う

その繰り返し

一見互角のように見えるが、僕の方が押されている

なにせ相手は7本中4本を結合したエクスカリバーなのだ剣の性能が違いすぎる

フリードが初めて扱う剣であることと、僕の技量が少し上のようで、なんとか互角の戦いをしてきたが、そろそろ慣れてきたらしくいくつか擦り傷が出来る

そして聖なる力により擦り傷が痛み体力を削られる

そして何度目かの衝突

「死ねやああああああ！」

「しまっグワア」

少し油断してしまった

ギリギリのところまで剣で防ぎ直撃は避けたものの、かなりの距離を飛ばされた
「フフフ…フフ…アハハハハハハハハ」

吹っ飛ばされた先で倒れていると急に頭上から笑い声が聞こえた

「素晴らしい！なんと素晴らしいのだ！まだ本調子ではないのにこれ程の力とは、7本を結合させるとどうなるのか実に興味深い！」

「バルパー・ガリレイ！」

僕は自分でも驚くほど憎しみのこもった声で奴の名を呼んだ

「ん？　なんだ貴様？　そんな憎しみを込めたような声で私のことを読んで　私が何かしたか？　ああそういうえば、今しているなこの街を破壊しようと」

「そんなこと…では…ない！」

僕はなんとか立ち上がろうとしながら言う

「僕は…聖剣計画の生き残りだ！　僕は…殺された…仲間たちの…ハアハア…無念を…晴らす…そのために貴様を倒さなければならぬグフア」

僕は最後まで言葉を出すことなくバルパーに頭を踏みつけられた

「ふん　被験者が1人脱走したと聞いていたがこんな所にいたのか　仲間の無念？　貴様は、そんなことでできずにここで死ぬのだよ　そうだホレ」

バルパーは少し離れると僕の前に一つの塊を投げてきた

「なん…だこれ…は？」

「フッフ 私かただ被験体を殺すと思うのかね？」

君たち被験体は聖剣を扱えるまでの数値を出すことはできなかつた だから私は考えたのだ！人では数値にとどかぬのなら、被験者から因子だけを取り出せば良いのだと、そして結晶化させることに成功した」

「ま…さか」

「その通りそれは、君の仲間たちの因子でできている結晶だよ もう必要ないから君にくれてやる」

僕は必死に手を伸ばし結晶を掴んだ

「みんな…こんな所に居たんだね」

「フリードそろそろトドメをさせ」

いつのまにかフリードが近くに來ていた

「あいあいさあ」

「そんじやあ死ねやあああああ!!」

そしてエクスカリバーは突き刺さったバルパーの胸に

アーシアと木場 END

「貴様…裏切ったのか…答えろ…フリードオオオオオオオオオオ
身体に剣が突き刺さったバルパーが怒りを込めて叫ぶ。
!!!!!!!」

その問いかけに対してフリードは、
「何言っちゃってんの？ 俺はあんたの仲間じゃねえーよ」

と、いつもと変わらないおちやらかな霧囲気で答えた。

「ふざけるな！」

バルパーは、剣を体から抜きながら後ろに跳びのき傷口を治療するが、慣れていないため、なかなか治らない。

「俺は、あんたに雇われたんじゃないコカビエルの旦那に雇われたんだよ」

「そうだな、裏切ったのは俺だな」

上空から声が聞こえると同時に、血が止まったバルパーの胸元に光の槍が突き刺さった。

「なに?！」

心臓からは、外れているが動けなくなるほどの激痛がバルパーを襲い動けなくなつて

しまった。

「俺の目的は貴様の持っていた結晶を手に入れることだ。そして今、結晶持っていないお前はただの邪魔者だ。死ね」

「お…のおれ…」

そして今度こそ確実に息の根を止めるため、先ほどより魔力と大きさが桁違いの槍を構え放とうとした瞬間

「ただでは…死なん！」

バルパーの真下に魔法陣が現れ、バルパー自身が光り始めた。

「!?まじい！」

それをいちはやく察知した僕は、さつきまで動けなかったのが嘘のように、全身全霊の力でフリードの足を掴み後ろに投げた。

「逃げろフリードオオオオ！」

「どういうこつたああああ」

フリードを後ろに投げた瞬間、激しい衝撃が体を襲った。

そうバルパーは自分自身を爆破したのだ。

そして走馬灯のようなものが見えてくる…

今とは全く違う、僕を拾ってくれた昔の優しくかった部長 少しSだったけど僕に暖か

さをくれた朱乃さん

いつも僕を心配してくれる小猫ちゃん

他にも様々な人との出会い

昔の楽しかった…夢のような時間の記憶が蘇ってくる。

きつと、僕はもう死ぬのだろう。

悔いがあるとすれば、彼が来てから変わってしまった部長たちを救えなかったことと、せめて最後に彼女に…アーシアにもう一度会い伝えたかった愛していると…

そこまで考えて僕の意識は闇の中に消えた

「……………」

「き……………」

「きば」

声が聞こえる気がした

「木場！」

そして今度ははつきりと聞こえた僕を呼ぶ声を

「起きろ木場！」

「お願いします起きてください」

もう一つ声が聞こえた、懐かしくそして愛おしい声

「…………お……き……てる……よ…………」

そして意識が一気に覚醒した

気がつくとは僕はボロボロの校庭ではなく白い部屋で辺りには色々な機会があり酸素マスクをつけられて体に様々なチューブが繋がっていた。

そして目の前には

「良かった、間に合ったか」

「良かったですうううう 目を覚ましてくれてええ」

髪型が違うが一誠くんに似ている顔、誠次くんと泣きながら僕に抱きついてくるアーシアがそこに居た。

「もう私、目を覚ましてくれないかと」

「ごめんね心配かけて」

僕も精一杯アーシアを抱きしめた。

最後に彼女に出会えて良かった、本当にそう思った。